

この世の困難

2006. 9. 5 (火)
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ローマ人への手紙 1章1節から6節

神の福音のために選び分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、— この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。あなたがたも、それらの人々の中であって、イエス・キリストによって召された人々です。— このパウロから、

この間、ある姉妹の残されたちょっと古いメモを見つけました。八十八歳で天に召されたおばあさんのものだったのです。三人の娘たちが、イエス様に出会って信じるようになってから、母のためにずっと祈り続けたのです。やがてこのおばあさんは、イエス様を信じ受け入れ、次のように書いたのです。「イエス様を信じましたから、本当に毎日平安に過ごさせていただいております。生きている間に聖書をどれだけ読めるか分かりませんが、今は、毎日聖書を読むこと、テープを聴くこと、お祈りすることだけが楽しみになりました」と。幸せな姉妹ではないでしょうか。

『わが恵み汝に足れり』という新しい小冊子を紹介します。H姉妹の作ったものなのです。彼女はもう四、五年間、癌を患っています。いつまでもつか分かりません。けれどもやはりイエス様を紹介したいと。本当にすばらしい小冊子です。

H姉妹は、以前に次のように書いたことがあります。

「今、私の目の前には二つの道があって、一つは主から目が離れ涙の日々をおくるか、もう一つは主に信頼して希望に満ちた日々をおくるかです。この二つの選択が日々あり、その中で今回（肝臓転移）のことも含め今までのこともすべて主のご計画と受け止め、またこの主のご計画には意味があると受け取ったとき、内側に生きていく力をいただき、主に信頼していこうという思いになります・・・」。

このような証しの文章を読むと、はっきり分かります。それは「主は生きておられます」「主の恵みは自分のために十分である」と。

今、司会の兄弟が言われましたように、この世の困難について考えたいと思います。題名は『この世の困難』にしましょう。プラスアルファ、「主イエス様のよみがえりの大切さ」について、また、「主の同労者になる必要性」についても学びましょう。

今読んでいただきました個所の中で、ローマ書1章1節に、「キリスト・イエスのしもべパウロ」とあります。原語は、もちろん「しもべ」ではなくて、「奴隷」となっています。「イエス・キリストの奴隷であるパウロ」。

ローマ人への手紙 1章4節

私たちの主イエス・キリスト。

パウロにとってイエス様とは、自分の罪を赦してくださったお方というだけではなく、「すべて」でした。「主よ、私はどうしたらいいのですか。お教えになってください」。

毎日、彼は必ず何十回もこのように祈ったはずです。自分が分かっているのではない。だからイエス様に頼らなくてはいけない、と。そして、主を信じる周囲の者にとっても。彼らも同じ思いを持っていたのです。結局、イエス様を信じることは土台ですが、決してそれだけでは十分ではないのです。

5節の終わりに、「信仰の従順」という表現が出てきます。本当の意味でイエス様を信じる者は、従順に従う者となります。なぜなら、私たちは相変わらず、「迷える羊」であるからです。時々証しの中で、「私は迷える羊でした」と。それでは今はどうなのか、と聞きたいでしょう？（笑）相変わらず同じ。（笑）「迷える羊だった」ではなくて、今もそう、将来もそう、でしょう。わがままだったわけではありません。今もそうですし、将来もそうでしょう。このどうしようもない者もイエス様に頼れば、イエス様が私たちの主となり、その結果はやはり違ってきます。

パウロの経験とは何であったかと言いますと、「私を強くしてくださる方によって、私は何でもできる」。それは自分が立派になった、強くなった、のではなく、イエス様に頼ることによってなのです。

こんにちの世界で一番大事な問題は、いったい何でしょうか。この世の一番足りないところは、いったい何なのでしょう。

もし、私たちがあらゆることについて考えたとしても、結局、この世の人々の問題は、「生命」なのではないでしょうか。全人類の飢え渴きは、やはり「生命」なのではないでしょうか。でも偽物ではなく、やっぱり本物が欲しいのでしょうか。

初めに、神なき人々について、考えてみましょう。すなわち、神なき人々の唯一の願い、また飢え渴きも、「生命」が欲しいのです。生まれながらの人は、生けるまことの神に対して盲目ですから、彼は知らずに闇のうちに「永遠なるもの」を見出そうと努力しています。もちろんこの人々は、主なる神のいのちや、霊的ないのち、永遠のいのちを全然考えられません。けれど、「永遠なるもの」に対する憧れがあります。金に対する飢え渴きも、自分の名誉が欲しいことも、あらゆる快樂の後ろにも、この「永遠なるもの」に対する憧れがあります。

次に、あらゆる信心深い宗教的な人々を観察してみましょう。お寺へ行ったり、線香をあげたりする人々は、大変多いのではないのでしょうか。彼らは自分の宗教が、或いは自分の習慣が、自分たちを救うと思っています。あらゆる習慣の後ろには隠れた不安があり、このいのちに対する飢え渇きがあります。

けれどこれは、異邦人の宗教がこのようであるばかりではなく、いわゆるキリスト教の場合も同じです。残念ながらドイツだけではなく日本でさえも、多くの牧師たちは本当の福音を宣べ伝えず、その代わりに、この世と同じ快樂と楽しみなどを与えています。この事実はやはり、信心深い宗教家の人々も同じで、まことのいのちに対する飢え渇きを持っていることが証明しているのではないのでしょうか。

また、私たちはいわゆるキリスト教の国々へ行くと、考えられないほど大きな集まりや特別な集会を見ることができます。私たちは驚いて、その人々に質問すると、彼らはすぐに「私たちは純福音を持っています」「私たちは奇蹟を行なう力を持っています」「ここにいのちがあります。いのちです」と言います。この人たちは度々、主イエス様の名を使って奇蹟を行ないます。知らないうちに悪魔の力で行ないます。これは恐るべき事実です。どうしてそんなに大勢の人々が集まるのでしょうか。ここには歴史的、習慣的、組織的なものではなく、「いのちらしきもの」があるからです。みな、「いのち、いのち、本物が欲しい！」からです。結局、本物が欲しいという気持ちこそ、人間が願っているということなのではないのでしょうか。

いわゆる新興宗教は確かに多くあります。政府もこの新しく興った宗教に対して新聞紙上で、疑問の攻撃をしたことがありますけれど、あまり役に立ちませんでした。どうしてでしょうか。やはりここでも、「いのちらしきもの」があるからです。ただの仏教的な習慣では、彼らが満足しなかったからです。けれど、本当に主イエス様によって救われた人々も、霊的な飢え渇きは持っていると思います。あらゆる会議や特別な集会がこの事実を証明しています。もし、ある種の人々が本当の心の糧をもっていれば、すぐに聴きたい人々が飛んで来ます。大きな困難があります。全人類は本物、まことのいのちに対する飢え渇き、憧れをもっているのです。

けれど、「いのちとはいったい何なのでしょう」、「いのちとは何を意味しているのでしょうか」。

この飢え乾いている人々に質問すると、彼らはみな、「生きて働かれる主の現実」と答えるでしょう。みな生き生きとした経験を持ちたいのです。彼らはいろいろな教理や教え、儀式や形式は欲しくないのです。ですから、彼らの飢え渇きは、やはり本物に対するものです。生き生きとした現実、生き生きとした経験をみな求めています。

いのちとは何かと質問すると、多くの人々は「力です。力が欲しい」と言います。力強いいのちを求めているのです。死んだ、冷たい力のない習慣的な信仰ではなく、力、能力、ダイナマイト。何かによって残る力が欲しいのです。

いのちとは何でしょうか。ある人々は「生きて働かれる主の現実」と言いますし、別の人々は「上からの力」と言いますし、また、ほかの人々は「満たし、満たされること」と言います。

しかしのちとはまことの満足です。ですから、だれもがこのようないのちを得るために求めて、努力するのです。あらゆる人間は、生き生きとした現実、生き生きとした経験、また、進む力と能力、そして重い困難を解決する満足感を求めているのです。これが、「この世におけるキリスト者の困難」と言われるものです。私たちがもし主イエス様との親しい交わりをもっているならば、この世を見ると当然悩むようになり、熱心に祈らざるを得なくなるのではないのでしょうか。

「この世の困難」に対する答えは、いったい何でしょうか。主のお答えは、「主イエス様のよみがえり」です。イエス様は復活なさいました。イエス様は生きておられます。

あらゆる困難は、「いのち」ということばにまとめられているので、それと同じようにその答えは、「よみがえり」ということばに全部含まれます。どうか一度、使徒行伝を読み、そして、「よみがえり」ということばが出てきたなら、いつも印を付けてください。これこそ最も大切だ、とだれでもが認めざるを得ないでしょう。新約聖書の一番大切なことば、一番深い秘密とは、「よみがえり」であるということが分かります。

けれど、「よみがえり」とはいったいどういうことでしょうか。

五つのことを考えたいと思います。

まず、人間にとって新しい立場を意味しています。

二番目、新しいメッセージを意味しています。

三番目、新しい力を意味しています。

四番目、新しい知識を意味しています。

五番目、新しい満たしを意味しています。

1. 「よみがえり」は、全く新しい立場を意味するのです。

したがって、よみがえりは、古いものは全部過ぎ去った、全て新しくなったということの意味します。すなわち、よみがえりを経験した人は、全く新しき立場をもっています。以前には全然知らなかった立場が与えられています。イエス様とともによみがえったことは、全く新しい立場を意味しているのです。

2. 新しいメッセージも意味しているのです。

すなわち、イエス様の十字架こそメッセージの中心になるに違いありません。

コリント第一の手紙の2章を読んでみましょう。

コリント人への手紙・第一 2章1節

さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。

しようと思ったならば出来たはず。けれども、みこころではないと彼ははっきりわかったのです。ですから彼の出した結論は、

2章2節

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。

人間的に考えれば、結果は良くなかったかもしれません。彼は誤解され、憎まれるようになってしまったのです。けれども、これこそ「よみがえり」を意味しているのではないのでしょうか。なぜなら、古いものは全部過ぎ去られなければ、新しい立場はあり得ないことであるからです。

十字架無しに、全て新しくなることはできません。十字架無しに、よみがえりはあり得ないことです。よみがえりの土台は、主イエス様の十字架です。

イエス様とともによみがえったということについて話すことはあっても、イエス様とともに十字架につけられたことについても話さなければ、意味のないことです。もし十字架が私たちの實際生活に影響を及ぼすなら、私たちは「よみがえりの力」も経験することができるのです。よみがえりは人間にとって全く新しい立場を意味しています。

したがって、よみがえりは、古いものは全部過ぎ去り、全ては新しくなったことをも意味しているのです。

3. 「よみがえり」は、人間にとって全く新しい力を意味しています。

けれど、この力は、決して人間的な力ではありません。よみがえりの力によって生きること、また奉仕する力は、全く主からの力です。絶対に人間の力ではありません。これは、人間の力では全く出来ません。人間がゼロにすぎないことを意味しているのです。

このことは覚えるべき事実です。なぜかと言うと、多くの兄弟姉妹はこの事実を聞いた時、もちろん反対しません。賛成しますが、實際生活においては自分の力で生活してしまいます。自分の力で奉仕することが出来ると思い込んでしまっているのです。教会の歴史を見ても、組織されたキリスト教会を見ても、また個人個人のキリスト者の生活を見ても、認めざるを得ません。すなわちどこを見てもみな、よみがえりのいのち無しに、自分の力で主に奉仕しようと努力しています。

組織されたキリスト教会を見ると、人間の計画、人間の組織、人間の目的、人間の事業だけが見えます。もちろん、これらの目的を達するために、人間の理解力、人間の考え、人間の意思、人間の興味、人間の熱情を使うわけです。けれどこの結果を見てみると、悲しくなります。やはり主は祝福することができません。

初代教会の兄弟姉妹は、「よみがえりの力」によって力強く証したので、世界帝国でさえも教会を滅ぼすことが出来なかったのです。かえって、「よみがえりの力」をもって、使徒たちは世界の果てまで前進したのです。彼らの宣べ伝えたメッセージは、「主は生きておられる」です。

けれどこんにち、世界帝国は、組織されたキリスト教に抵抗する力をもっています。なぜなら、こんにちのキリスト教は、人間の計画、人間の心、人間の組織、人間の目的、

人間の事業があり、そして人間の理解力、人間の考え、人間の意思、人間の興味を使って、自分の力で自分の定めた目的を達しようと努力しているからです。

主のよみがえりは、人間にとって全く新しい、主から与えられた力なのです。

4. 「よみがえり」は、全く新しい知識を意味しています。

この知識は、「知る」ことではなく、「啓示」つまり主なる神から示されたことを意味します。もし私たちの生活の土台がよみがえりであるならば、私たちは、この聖霊の啓示によって、新しい、全く新しい知識をもっているはずです。すなわち、聖霊が私たちの心にイエス様について語るのです。もし、聖霊がみことばをもって私たちの心に語るなら、私たちは本物をもつようになります。

ある人がキリスト教の歴史を学び、そして信じ、また、キリスト教の習慣をもって生活しているとき、そのような人は決して救われた者とは言えません。教会に行くことによって、または教会員になることによっても救われません。伝道会によって、あるいは、教理問答集によっても救われません。けれど、もし聖霊がみことばによって人の心に語るなら、その人はイエス様の啓示を受けたことによって本物を得るようになります。

この経験についてパウロは次のように書いたのです。ガラテヤ書1章12節。よく知られている証しです。パウロはここではっきり、「みなさん、教えではない。心の目が開かれなければダメです」と言っているのです。

ガラテヤ人への手紙 1章12節

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

努力の結果ではなく、学びの結果でもなかったのです。

私たちが聖書を読むときはどうでしょう。私たちは内容だけがわかるのでしょうか。イエス様がこの聖書のことばを通して、透き通って見えるのでしょうか。

聖書の霊的な意味をつかむべきです。この霊的な意味は、実際生活の経験によって初めて、自分のものとなります。

ですから私たちにとって困難と苦しみがどうしても必要です。生き生きとした、実際の主イエス様を見ることは絶対に必要なのです。それは聖霊の働きによってのみ可能です。聖霊は、永遠の霊的な現実に対して、私たちの心の目を開くことができるのです。

よみがえりは、この新しい知識を意味しています。

5. 「よみがえり」は、全く新しい満たしを意味しているのです。

よみがえりは、究極がなく、無限に歩むことを意味しています。もし私たちが生き生きとした霊的な経験を持っているならば、無限に歩めることを知るようになります。私たちは何年間主に従ったか、また、どの程度まで私たちはイエス様を受け入れたか、どれほど

イエスを学んだかなどは問題ではなく、私たちはただ一つのことを知っています。すなわち、私たちはキリスト者の生活の始まりだけを経験したということです。

私たちは究極のない無限なところに入り、更に将来限りない「キリストにある知識」を自分のものとしなければならないということを知っているのです。そして、私たちの心は平安をもっています。イエス様によって満足しています。

よみがえりは、この確信を与えるものです。私たちはこの確信と満たしをもっているのです。そしてこの満たしは余りにも大きく、限りなく広いのですから、私たちは永遠に進むことができます。これがよみがえりです。よみがえりとはすばらしいことなのです。

よみがえりは、十字架により、新しい立場、新しい力、新しい知識、新しい満たしを意味します。この世の困難に対する主の答えは、「主イエス様のよみがえり」です。

最後にもう一つの点について。すなわち、主は同労者を捜し求めておられるということです。信じる者だけではなく、従順に従う人々を用いようと望んでおられるのです。

結局、どのようにしてこのよみがえりの力は、現実になるのでしょうか。どのようにして私たちの生活を通し、この世の困難を解決することができるのでしょうか。私たち一人一人が、実際生活において十字架の意味を新たに悟らなければなりません。

前に話しましたように、全人類は「永遠なるもの」に対しての飢え渴き、憧れをもっています。いのちに対する困難があれば、死の状態があるはずですが、つまり「霊的な死」があるはずですが。

この「霊的な死」の理由とはいったい何でしょうか。この「霊的な死」の状態から逃れる道があるのでしょうか。この死の理由というのは、十字架の事実を知らないこと、またはこの十字架の意味を悟りたくないことなのです。

多くの兄弟姉妹は十字架の本当の意味を知りません。主を信じるようになった者はもちろん、イエス様の十字架は、神の御子がお自分の救いの働きを完成された場所であることを知っています。神の小羊としてイエス様は、この世の罪のために十字架で死なれ、そうすることによって主なる神のみこころを満たされたのです。

ですからイエスを信じる者は、主なる神がイエスをよみがえらせ、引き上げ、将来の世界の支配者とされたのだということを知っています。別に拒む気持ちもありません。けれど、十字架の更に深い意味を、私たちは経験しなければなりません。イエスのなされたことは、私たちのうちに現実とならなければなりません。そのためにイエスは死なれたのです。

イエスの死は私たちのうちに現実となり、私たちもイエス様と共に死ななければなりません。私たちの自分の考え、自分の欲すること、自分の思い、自分の志すこと、自分の目的などは、全部否定されなければならないということを知るべきです。もし私たちが反対したら、私たちは従順の意味が少しも分からないこととなります。

イエス様の十字架で流された血潮は、私たちの罪を洗いよめることができます。イエス様の血は、全ての罪、無意識のうちに犯した罪も赦す力をもつものです。けれども、私たちの古き人を洗いよめることが出来ません。古き人を十字架につけるために、十字架が必要です。

私たちの全ての罪は、血によって取り扱われ、更に私たちの古き自己は、十字架によって取り扱われなければなりません。イエス様は私たちの代わりに、私たちの「古き人」として、十字架につけられたのです。

ですから、もし私たちが自分の力で、自分の思いに従って主に奉仕しようと思うなら、私たちはこの考え方によって、イエス様は嘘つきであり、十字架は別に必要ないということになってしまうのです。これは非常に恐ろしいことではないでしょうか。

もちろん全ての兄弟姉妹は、私たちの古き人はイエス様といっしょに死んだと言うでしょう。教えとして、もちろん疑わずに信じます。しかし実際的になると、多くの兄弟姉妹は、この十字架の意味を退けて、嫌います。私たちは実際生活において、イエス様の死のさまと等しくならなければ、私たちはイエス様を信じる者として気の毒な、あわれむべき存在となるのです。

「十字架の満たし」を、私たちの生活によって現わさなければなりません。

パウロもこれを経験したので、次のように書いたことがあります。

コリント人への手紙・第二 4章10節から12節

いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。

「いつでも」、たまにはではなくて、いつでもです。

よみがえりの力は、この世の困難に対する答えとして、新しく現わされなければなりません。

- ・ どうしてこんにち、よみがえりの力があまり現われないのでしょうか。
- ・ どうして自分の家族の中で、親戚の中で、また、知り合いの人々の中で、主は力あるみわざがお出来にならないのでしょうか。
- ・ どうしてイエス様の偉大なる力が、働くことが出来ないのでしょうか。

私たちは十字架につけられていない者だからです。もし、この上からの力が、私たちのうちに現われていただきたいなら、この腐っている古い自己は、十字架につけられなければなりません。古いものは全部過ぎ去らなければなりません。

疑いもなく、パウロの生活によって主は、働くことがおできになったのです。パウロの生活によってよみがえりの力が現われたのです。けれど、このパウロこそ、自分の習慣、

自分の知恵、自分の学んだ教え、自分の力を捨てなければならなかったのです。パウロは、
実際生活において十字架の意味を理解して、経験しました。

コリント第一の手紙を読むと次のように書かれています。

コリント人への手紙・第一 2章1節、2節

さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。

また、パウロは次のように書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 6章14節

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

もうアウトです。十字架につけられたイエス様、復活なさったイエス様、近いうちに来られるイエス様こそが、パウロにとって全ての全てでした。彼は、霊的だけではなく、肉体的にも、主イエス様に全く従属するようになったのです。

もう一箇所読みましょう。パウロの正直な告白であり、証しです。

コリント人への手紙・第二 1章8節、9節前半

兄弟たちよ。私たちがア ज्याで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危うくなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。

もう終わり。

主を第一にしたパウロたちはこのように苦しめられたのです。もちろん、目的をもって主はこのように導かれたのです。目的とは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。まだなっていなかったのでしょうか。

十字架が自分の心の内に現実になると、よみがえりの力を経験することができるのです。どのようにして、私たちはイエス様のよみがえりの力を経験することができるのでしょうか。イエス様の死のさまに等しくなることによってです。イエス様の死のさまに等しくなることは、「よみがえりの力の秘訣」です。

パウロは、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまと等しくなるということを経験したのです。主イエス様の死のさまと等しくなることは、よみがえりの力の秘訣そのものです。これは本当に覚えるべき大切な知識、事実ではないでしょうか。

どうでしょうか。

- ・私たちは、自分の考えを握って、自分の思い通りに前進したいのでしょうか。
- ・私たちは、よみがえりの力より自分の人気欲しいのでしょうか。
- ・私たちは、毎日、イエス様をよりよく知りたいと望むのでしょうか。或いは、人の関心を買いたいのでしょうか。

パウロは、証したのです。「もし、今もなお人の関心を買おうとしているなら、私はキリストのしもべではあるまい」と。これこそ、パウロの努力の結果ではなく、御霊の働きの結果でした。

そしてイエス様は言われました。「地上に平和をもたらすために私が来たと思うな。平和ではなく、剣を投げ込むために来たのです。だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも捨てて、わたしのもとに来るのであれば、わたしの弟子となることはできない。自分の十字架を負ってわたしについて来る者でなければ、わたしの弟子となることはできない」とイエス様ははっきり言われたのです。

なぜなら、人間の力で主に仕えたい、また人間の考え、人間の思いをもって主に奉仕したいなどは、全く意味のないことであり、愚かなことです。もし、人間の考え、人間の計画を使うことができるなら、十字架は必要ないはずで。

大切なのは、主イエス様について話すこと、またイエス様を紹介することよりも、聖霊によって与えられた主イエス様に対する啓示なのです。イエス様をよりよく知ったということになれば、本当にすばらしいのではないのでしょうか。

この世の困難を解決するために、イエス様から備えられた器が必要です。

- ・この器は十字架を徹頭徹尾経験しなくてはなりません。十字架によって、生まれながらの思い、人間的な考え、自分の力が過ぎ去られなければなりません。
- ・この器は全く新しい立場を取らなければなりません。
- ・この器は全く人間の力によらないで、ただ主にだけ従属しているのです。

この世の人々みな、**「いのちに対する飢え渇き」**をもっています。この困難を解決するために、**「よみがえりのいのち」**が必要です。けれどよみがえりは、初めに、死の場所を意味しています。死無しに、よみがえりはあり得ないことです。これが十字架です。

よみがえりの力は、全く人間の力ではなく、徹頭徹尾主の力です。この主の力が、毎日の生活を支配したなら、この人こそ主の器となります。

教え、または教理が大切なのではなく、聖霊が、私たちにイエス様についての啓示を与えることが出来るか出来ないかということです。イエス様でさえも、父なる神の考え無しに、自分の考えによっては何事もなさいませんでした。私たち兄弟姉妹も、聖霊の働きによって、みことばを通して、また、次第にイエス様の満たしまでに成長しなければなりません。これがよみがえりです。

そしてこの**「よみがえりの力」**は、器を通して働き、現わされなければなりません。

今述べたことを考えると、兄弟姉妹一人一人が祈りの材料を持つようになります。これらを持って主の御前に出ましょう。この事がらが私たちのうちに現実になるように。そして一人一人がイエス様の死のさまと等しくなるように祈りましょう。

そうすると初めて、生きておられる主イエス様が、私たちの生活の支配権を持っておられて、よみがえりの力を現わすことがお出来になり、聖霊は力あるわざを私たちの家族の中、私たちの親戚の中、知り合いの人々の中で、働くことがお出来になるのです。

十字架につけられた者だけが、主の器となります。十字架につけられた者だけが、主に對する聖霊の啓示を受け、また、良き管として、この世の困難を解決することが出来るようになります。主に頼ると、主は大いに働いてくださり、恵んでくださいます。

了